

認知症国際フォーラム

テーマ：鍼灸によるお年寄りのQOL

後藤学園ライフエンス総研中医学研究部部長 天津中医薬大学客員教授

兵頭 明

1人1人が持っている力を大切にし、守り、そして発揮させるという考え方は、2000年以上にもわたって中国ではもちろんのこと、日本でも1500年にわたって継承されてきた基本的な考えかたであり、これが東洋医学の真髄の1つと言われているものです。この力について、現在は自然治癒力、抵抗力、ホメオスタシス、免疫力などといったいろいろな言葉で表現されています。人が本来もっている力を大切にする、人にやさしい医学、そして全人的にアプローチする、それが東洋医学なのです。

そもそも私達には、いったいどのような力が秘められているのでしょうか。私達は生まれてから成長し、青年期、壮年期を経て、一定の年齢になると老化現象が始まってきます。この成長、発育、老化を決定しているのは何なのでしょう。これらは大きなテーマですが、東洋医学ではこのテーマをどのようにとらえ、そしてどのように実践しているのかを一緒に探ってみましょう。この観点にたって今日のテーマである「鍼灸によるお年寄りのQOL」について、一緒に考えていきたいと思います。

年をとってくると、いろいろな症状がでてきますが、それらの中で脳、耳、腰、膝、骨、歯、髪といったキーワードと関係する諸症状は、ある病態と連動して起こってくると東洋医学では考えています。こういった症状を複数もっていると、ADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）にも影響が出てくるようになります。多くの症状に対して、個々に解決していくのではなく、トータルに全人的な医療を提供するのが東洋医学です。

日本では2025年を目標にした健康づくりに関して、「70歳現役社会で高齢者の健康・働き甲斐・満足度・QOLを大幅向上、老若男女一人ひとりが志を持ち心身ともに元気」といった考え方が示されています。これらのテーマを実現するためには、やはり全人的な医療が必要とされることでしょう。認知症の問題についても認知機能の問題だけを見るのではなく、全人的な視点をもった取り組みが日本では行われはじめています。東西医学の連携をベースにして、認知症に対する医療ネットワーク、街ぐるみ支援ネットワークの中で日本の漢方、鍼灸の果たせる役割を一緒に考えてみたいと思います。